

中日文化交流の使者

——老華僑 陳徳仁氏——

郭 玉 聡 ・ 朱 新 建

0. はじめに

神戸の華僑は、人数は1万人足らずで経済的にもそれほど裕福ではないが、その名は世界に知られており、日本の華僑社会においては重要な位置付けを有しているだけでなく、世界華僑史にも輝かしい1ページを残している。これは、神戸は著名な華僑活動家を輩出しているからである。二世の華僑後裔としての「老華僑」陳徳仁氏はこうした優れた人物の一人である。

1. 陳 徳仁氏の一生

陳 徳仁氏は1917年3月7日に神戸市に生まれた。父親は陳達文、広東省南海県生まれで、母親は本名長島、神奈川県生まれである。幼い頃から父親に広東方言を教わり、家では広州方言を使っていた。小さいときから中国の詩文の勉強をしていた。8歳から18歳までは前後神阪中華小学校（現在は神戸中華同文学校）、碧梧学校（神戸中文専門家館）に在学し、23歳から26歳までは大阪外国語学校（現在大阪外国語大学）の中国語学部に学んでいた。青少年時代から良好な中国文化の教育を受けていたため、陳氏はその頃から中国を熱愛していた。

1943年に大学を卒業すると、南京の汪精衛傀儡政権は彼を広報宣伝部の要職に据えさせようとしたが、陳氏は固辞した。彼は自分の青春時代と愛国情熱を神戸華僑に捧げた。日本の敗戦まで、神戸の華僑は戦火の苦をいやなほど浴びせられ、ホームレスになってしまった華僑は80%もいることに直面している陳氏は友を呼び集め、有志者50人の華僑青年を結集して自給のための生産開墾隊をつくった。1945年8月15日に成立した「神戸華僑開墾隊」はまさに行

動に移すその日に、日本は全面降伏をしたため解散を宣告した。その場で「神戸中華青年会」を成立し、陳氏は会長に選ばれた。この「神戸中華青年会」は戦後の神戸の、一番目の華僑団体である。1945から1947年の間、彼は神戸華僑総会の成立のために活動し、中華同文学校の回復のために心血を注いでいた。彼は神戸華僑総会の一番若い理事であり、副会長でもあった。それに中華同文学校の一番若い理事でもあった。1947年には有志者とともに「神戸華僑労資合作社」を創設し、自ら社長となった。これも当時の華僑経済の回復に寄与している。

華僑の公益事業に熱心な陳氏は華僑の人達と関係がいっそう密接にしたものとなり、中国との往来も頻繁になり、中国のことをますます熱心になった。彼の人生はそれから中国と関係ある事業に没頭しながら進んで中日交流の橋架けの構築に活躍するようになった。

昔も今も日本の華僑が日本人に帰化した者は数え切れないほどあったといえよう。もっとも、日本人に帰化すれば華僑自身の生存と発展にももっと有益であろう。しかし、民族意識の強い多くの華僑は「日本人の名前に直して日本人に帰化することは、先祖に背き根本を忘れるのには至らないが、祖国中国との連帯感が薄れることは認めざるを得ない」と思っている。陳徳仁氏は日本人に入籍することを主張し、また「日本人にならなければ日本人しか享受できない社会権益は求められない。そうしてはじめて中国のために役立てる」という日本の国籍を取得しようとする人達の考えにも同感であった。陳氏自身は氏の身分や社会的影響力からしても日本の国籍を取得することはさほど難しいことではないはずだが、ずっと中国の国籍で居ることで日本の国籍を取得しなかった。彼は1976年にこのように話したことがある。「中国はいま中日友好を大変重んじているので中日友好は即ち中国人民と日本人民の友好である。もし余が日本人になったら中国人の親類にすぎず、日本人の身分でもう自ら中国人として手本を示すとはできなくなる」¹⁾。

陳徳仁氏は終始自分は中国人であると自認していた。彼の生涯は祖国中国への愛情を物語っている。著名な愛国華僑のリーダー、神戸華僑総会会長林同春氏は陳徳仁氏の生涯をこう締め括って、「陳さんは祖国を熱愛し、祖国に貢献した先駆けの存在であり、我々は彼を敬愛している。陳さんが華僑に捧げた愛は忘れられないものであり、彼の残した遺産は永遠に子々孫々のために役立つものだ」²⁾と言った。

一世の華僑は祖国熱愛の代名詞そのものであった。だが、二世の陳氏は華僑の後裔でありながら日本人の母親を持っている。周知のとおり、1894年の日清戦争に負けた中国は半世紀もの年月に戦禍、貧困、蹂躪を嘗め尽くした。世界にいる華僑たちも同じ苦しみを味わわされた。それがあってこそ、陳徳仁氏の中国認識、愛国情熱はいっそう有り難くて並々ならぬものとなっていた。

2. 陳 徳仁氏の中日文化交流への貢献

半世紀以上華僑事務に尽くした陳氏は、普通の華僑には備え難い肩書きを一身にあつめた。

彼は実業家である。彼は「中美商行」株式会社、協成泰株式会社、華美利株式会社などの会社を設立した。また上海で太平洋貿易会社等の会社でマネージャーを兼任したこともある。しかし、彼は華僑の全般的な経済実力に関心を寄せていた。1957年に彼は神戸華僑貿易振興会を創設して会長に就任した。彼がリーダーの肩書きを持っているその外の団体は華僑経済と直接ないし間接の結びつきがあるものばかりである。1960年代神戸中華総商會が停滞不振であった際に、彼は危機間一髪に出陣し、自分の才能を生かして日本政府と華僑の仲介役となって根回しなどして神戸の中華総商會を法人格にすることができた。華僑の間にそれぞれの立場があるが、彼は「団結第一、政治第二」の方針を堅持し、不況を乗り切って会務の事業を活性化した。彼は5億円余りの資金をあつめ、10階建ての中華総商會ビルを建てて、16年間も会長の任を全うした。陳氏の指導下に中華総商會は名実ともに華僑の商務活動の大本営となっていた。戦後彼は友人の滝川儀作氏、西好隆氏に協力して神戸日華実業協会をつくった。この会は日中経済交流が目的で著名な実業家達が集まり、会長は神戸で一番有名な「親中派」の実業家が就任する。陳 徳仁氏はこの会の副会長を長年つとめた。陳氏は神戸の中華街——南京町の復興にも力を尽くしていた。数十年来、彼はいつも大局に着目し、華僑の経済実力の向上に、そして中日間経済交流強化のために努力していた。

彼は社会活動家である。神戸華僑に属する代表的な団体は陳氏抜きには語れないものが多い。たとえ本来彼とそんなに親密な関係になかった団体である福建會館、江蘇、浙江一帯の三江會館も彼の手によって戦後復興できたのである。彼はとくに中日交流、中日友好事業に力を入れている。彼は神戸で華僑歴史博物館を創設し、館内所蔵の多くはどれも彼が大金をかけて求めてきた数々の品である。海外はじめての華僑博物館で、日本の、各国の研究者と華僑華人研究を行なう学术交流の窓口となっている。彼は山口一郎教授等と孫中山記念館、孫中山記念会を創設して、自らその要職の副館長、副会長をつとめた。陳氏をはじめ日本友人の協力の下で、孫中山記念会は1億円以上の基金を有する財団法人になった。世界一の経済的サポートのある孫中山記念会である。この会は毎年のように各種のイベントを主催し、国際シンポジウムも数回開催された。中日両国の友好関係を増進するため、兵庫県は広東省と友好姉妹県省締結する際に、彼は中国各界の友人の力を借りて成功させた。

彼は教育事業家でもある。彼は長年に神戸華僑幼稚園の理事長に就任した。戦後彼は、神戸中華同文学校の再建に取り組み、1957年には学校の充実した発展を図るため、彼は毅然として学校の理事長に就任し、多くのパイプを通して資金調達し新しい校舎をつくった。銀行から

2500万円の融資を受けるため、陳氏と林 同春等 5名の取締役の個人担保が必要になっていた際、彼は真面目な口振りで仲間こう言った。「公を優先して私を後回ししなければならない。もし募金が不足する場合、自宅を売却しても返済をすること」³⁾それで、彼は取締役達とそれぞれ500万円の担保をした。当時の500万円はちょうど卒業したばかりの大学生の年間給料の50倍であった。彼はまた何香凝女史の力を借りて中国側から巨額の援助金を獲得したそうである。こうして同僚達とともに努力した結果、1億円の資金を調達できた。彼は10年間理事長を歴任して神戸中華同文学校を日本で規模一、影響力一の華僑学校に作り上げた。今は世に広く知られている華僑学校となっている。この学校は多くの優秀な人材を養成し、輩出させた。多くの卒業生は帰国して中国の建設に参加し、中には傑出した人物もいる。現在は中国全国台湾同胞連盟主席、中日国交正常化の際の、周恩来の通訳だった林麗韞女史がその一人である。「文化大革命」の時期には日本の華僑学校にも波及されていた。その時やむなく理事長の任を解いた。「文化大革命」が終わったら彼はまた、浙江省錦堂師範学校の復興に力を入れていた。それ以降はずっとその学校の名誉校長であった。その外、彼は暨南大学の理事であり、福建師範大学の顧問でもあった。

彼はまた徳望のある教師で、研究成果多き学者でもある。

数十年来、彼はどんなに忙しいときでも時間を割いて中日交流の資料、華僑史の資料の収集に当てて学術研究をしていた。孫中山研究と華僑史研究の成果を伝授し中華文化を広める。彼は華僑史資料と孫中山の資料の収集のため大金を惜しまず地球の隅々へ足を延ばした。博物館事業を発展させるために彼は中国の多くの博物館を見学した。彼は中国の書画、文物を日本へ、そして海外の文物を中国へ展示するために奔走した。彼は500万円を費やして日本複製の台湾故宮博物院収納の各時代の中国画を購入して中国の旅順博物館や北京美術館などに長期の無償展示を提供した。

彼は毎回のように孫中山研究会や神戸華僑研究会の主催した学術活動に参加した。彼はよくこの二つの研究会及び日本の大学や研究機関で講演を行なった。青年学者にたいしては心行くまで指導し、無私に貢献した。日本の例を挙げると、天理大学の市川信愛教授は陳 徳仁氏の「学恩」を偲ぶとき、陳先生の指導の下で『華僑学校の国際比較研究』を書くときに、「陳先生は貴重なお時間を割いて、何回も私と一緒に日本国内や海外へ華僑学校の訪問調査に行ってきた」⁴⁾と述べた。華僑研究家過放博士は、陳 徳仁氏先生は彼女を日本と神戸の「華僑歴史研究の大河」⁵⁾へ案内してくれた恩師だと言っている。神戸商科大学陳来幸助教授は、「陳先生はいつも惜しみなく貴重な資料、原始情報を若手学者に提供した」。そして、「陳先生の恩恵を受けた内外の専門家や学者はどれほどいるかが分からない」と⁶⁾。中国の学者の場合だと、陳氏の招聘を受けて羅晃潮等の学者達は広州から廈門から、上海から日本に渡航した学者はより多く

の恩恵を受けていた。陳 徳仁氏は自ら彼らに華僑史研究、孫中山研究を指導しながら、彼らの「受入教官」も担任した。彼らが渡航の手続きだけでなく彼らが日本滞在中の研修費、研究に関わるすべての費用を負担した。晩年にまた、厦門大学、福建師範大学の客員教授をも兼任した。

彼の執筆活動は一時も途絶えたことはない。著書には『辛亥革命と神戸』、『孫文と神戸』(共著)、『神戸華僑編年史』、『隨筆集』、『孫文・汎アジア主義論総集』(共同編集)、『神戸中華同文学校八十周年記念刊行』などがある。その中、安井三吉教授との共著の『孫文と神戸』は「村尾」学術賞に受賞した。そして、彼は多くの刊行物にも文章を発表した。山口一郎教授は、陳氏は神戸華僑ないし神戸地区の世界へ自慢できる文化人であると高く評価している⁷⁾。

陳氏の生涯の中で一番心血を注いでいたのは教育と文化である。教育と文化についても独自の見解は少なくなかった。

彼の考えでは、中華民族は教育重視で世に誇りをもっている民族である。「孟母三遷」の話から「映雪」、「囊螢」の物語まで、彼にとってはわが家の宝物のように詳しい。彼は、貧乏こそ教育を必要とするものだと考えている。中国政府はよりいっそう教育に投資しなければならない。同時に大衆の教育に対する情熱をもそそらせるべきである。「経済が発達したら教育をゆっくりと発展させる」という考え方は間違いで、教育認識不足の言い逃れであると指摘した。

彼は、中国の一番優れたものは広い土地と物産の豊富さ、人口の多いことなどではなく、中華文化を有している。中華文化は進化する必要があるが、悠久な歴史的源流、博大精深で中国は堂々たる文化大国に違いないと考えている。文化は民族の魂であり、文化大国こそ名実ともに大国になることができるのである。

陳 徳仁氏は実業家であると同時に社会活動家でもある。そして教育事業家と学者でもある。言わば、四つの名称を一身に集めた方で、それに自分の特色がある。華僑リーダーの中でも珍しい人物で、現代日本華僑史においても類を見ない人物である。

3. 晩年の陳 徳仁氏の中国への貢献

陳 徳仁氏は華僑のリーダーであるが、最も貴重で人の心を打つのは、自分の命と財産を祖国に、そして、中日交流事業と華僑社会に捧げる大公無私精神である。数十年来、彼はいつも「先公後私」というモットーで自分を激励していることである。

晩年、神戸中華総商会会長の任を辞して顧問になってから陳氏は、それでは中日間の交流のためにもっと時間をかけたいと思い、もっと夢を追いたいと考えた。90年代の初め頃には夫

人は重病をかかえ、夫人の看病を一番必要としている時に彼は、山口一郎教授らと大連と神戸の間で奔走していた。中日文化交流を目的とする文化村を大連につくりたいからである。それから廈門大学に中日交流会館をつくりたいから何度も廈門を訪れた。家族や親戚、友人たちは彼のこうした振る舞いを理解できずにいたが、彼は全く気にしていなかった。

彼は高齢を迎えたが、断固とした意志と卓越した才能と我を忘れる精神でもって更なる事業展開は可能であった。神戸日華実業協会副会長の西好隆氏は彼の仕事を回想しながらこういった。「日中経済交流は利益追求が目的ではない。陳先生は日本の財界、経済界への貢献が大きい。多く難題、実現不可能のことでも、陳先生の指導では実現できる」⁸⁾しかし、彼の80歳の頃には多くの状況が変わったのである。

確かに陳氏は人一倍に人脈のネットワークがある。このネットワークを利用すれば十分な財源が確保できる。しかし彼は、祖国や社会に奉仕し、私利を求めず、友人を助け、報恩を求めずの信念を貫いた。私利を求めれば心は汚される。人に勧められてもきっぱりと断る。

華僑華人のネットワークは、今や貴重な社会資源としてよく利用すべきものだと思われていたが、彼はこの貴重なネットワークは中日交流の橋架けに利用すべきで、社会の公益事業に利用すべきであると考えていた。彼は自分に厳しく、道徳の完璧さを追求している。

こうすると、彼の夢は自分の財力と寄付金に頼るよりほか方法がなかった。

思いがけない災難はたて続きに起きた。夫人が亡くなって間もなく、医者に不治の病を宣告され、もうこれ以上仕事はだめだと言われた。そして、1995年1月の神戸大震災は神戸の華僑に莫大な損害をもたらした。彼の不動産も大きな被害にあった。

彼はその二つの計画をやむなく放棄せざるをえなかった。しかし、彼は病気の身を抱えながら何回も福建省を訪れ、福建の教育文化事業に関心を寄せていた。彼は残り僅かな財産の中から廈門大学と福建師範大学にそれぞれ100万元（それぞれ1500万円相当）の人民元を寄付した。また廈門華僑博物院に10万人民元（150万円相当）を寄付した。彼はまた行く先々で講演し、仕事に参加した。この時はすでに重病の身であった。

彼の道徳操行は中国にだけでなく日本にもある種の戒めが効いている。西好隆氏はこういった。「世の中は経済優先論、個人利益優先論の風潮が騒いでいる。日本も現在政界、官界、経済界等各階層には想像し難い問題が起こっている。その原因は末端組織には国のために民族のために我を捨て勤勉に仕事する人が不十分だからである。今の日本社会は陳徳仁氏のような人物が必要である」⁹⁾。

4. おわりに

陳氏は名利に淡泊だが、多くの特別な榮譽の持ち主であった。1984年には日本政府から「勲五等瑞宝章」を陳氏に授与し、彼の中日友好事業への尽力、中日間の貿易事業への貢献を表彰したものである。瑞宝章は国家レベルの勲章であり、皇居で天皇陛下により授けられる。彼は華僑として瑞宝章を受賞した第一人者である。1986年には兵庫県からは「国際交流功労者章」、そして1995年には福建省政府の褒賞——「英才楽育」を受賞した。その他は廈門海外聯誼会が氏に与えた名誉理事長などの名誉は、枚挙に暇がない。

もっとも重要なのは、陳氏は神戸華僑及び中日友好を愛する人々の心の中に無形のモニュメントを建てたことである。1997年4月28日に亡くなった時は遺族達が簡潔に喪の事と考えていたが、神戸の各界人士はそのあとに氏の追悼会を挙行した。追悼会では後任の神戸中華総商會會長、神戸日華実業協會副會長、神戸中華同文学校理事長で二世華僑の黃耀庭氏は、神戸の華僑界を代表して陳徳仁氏の靈前で誓いを述べた。「私はここに、先生の靈前で誓います。先生の遺志を受け継ぎ、祖国のために、中日友好のために更なる貢献をします。先生のような人材の育成のために一生懸命に頑張ります」¹⁰⁾。

二世、三世華僑華人は今や神戸華僑社会の中堅的役割を果たしている。90年代の各華僑組織のリーダー達のほとんどは二世三世の華僑後裔である。陳徳仁氏のような華僑はもうどれくらいいるかは知る由もないはずである。

注

- 1) 陳徳仁「華僑と祖国」、1976年11月『社団法人神戸中華総商會會報』40号。
- 2) 林美「神戸華僑リーダー陳徳仁氏追念会にて」、『陳徳仁氏記念集』に収録。
- 3) 林同春「民族教育は永遠のものに、同文学校は千載の事業へ」、日本『時報』1999年5月27日に収録。
- 4) 市川信愛「陳徳仁氏の学恩を偲びて」、『陳徳仁氏記念集』に収録。
- 5) 過放「陳徳仁氏を痛切に偲びて」、『陳徳仁氏記念集』に収録。
- 6) 陳來幸「陳徳仁氏を痛切に悼みて」、『陳徳仁氏記念集』に収録。
- 7) 山口一郎「陳徳仁氏を偲びて」、『孫文研究会會報24』に掲載。
- 8) 前掲注2)に同じ。
- 9) 西好隆『亡友陳徳仁氏を緬かいす』、1999年4月28日の追悼の辞、陳徳仁氏追念会にて。
- 10) 黃耀庭『陳徳仁氏を偲びて』1999年4月28日の追悼の辞、陳徳仁氏追念会にて。

主要参考文献

鴻山俊雄、1979、『神戸大阪の華僑——在日華僑百年史』、神戸華僑問題研究所

- 森晴秀編著、1982、『神戸を語るえとらんぜ 神戸・日本・世界 森晴秀対談集』、神戸新聞出版センター
- 陳 徳仁氏／安井三吉、1985、『孫文と神戸』、神戸新聞総合出版社センター
- 陳昌福、1989、『日本華僑研究』、上海社会科学出版社
- 神戸大学社会学研究会、1990、『特集 神戸の華僑』、『社会学雑誌』第7号
- 吴柏林、1990、『福建公所今昔録——財團法人福建會館の創立及其現状』、(財)福建會館事務局
- 羅晃潮、1994、『日本華僑史』、広東高等教育出版社
- 安井三吉・陳来幸・過放編、1996、『阪神大震災と華僑』、神戸商科大学・神戸大学『阪神大震災と華僑』共同調査報告書
- 過放、1999、『在日華僑のアイデンティティの変容』、東信堂
- 中華會館編、2000、『落地生根——神戸華僑と神阪中華會館の百年』、研文出版